

研究ノート

ゲランドについて語る作家たち
—バルザック、デュ・カン、ドーデー—

Écrivains parlant de Guérande :
Balzac, Du Camp, Daudet

小倉 和子*
Kazuko OGURA

Guérande est une petite ville bretonne entourée de remparts médiévaux et près de laquelle s'étendent des marais salants. À partir de textes écrits au XIX^e siècle, entre autres des textes de Balzac, de Du Camp ou de Daudet, nous allons dégager quelques images de cette ville pittoresque.

Keywords : ブルターニュ地方 (la Bretagne)、ゲランド (Guérande)、城塞 (remparts)
塩田 (marais salant)、塩田労働者 (paludier)

1. はじめに

フランスの大西洋岸に突きだした半島部分、ブルターニュ地方についてわれわれ日本人がいちばん最初に思い浮かべるのは、クレープやリゴ酒だろうか。もう少しこの地方に詳しい人なら、トリスタンとイゾーを主人公にした中世の悲恋物語や、先史時代のものとされるカルナックの巨石群、あるいはゲランドの天然塩などを思い出すかもしれない。

パリからは思いのほか遠く、交通の便もよくなかったブルターニュ地方は、18世紀まで、旅行者からは見向きもされない土地だった。しかし、ロマン主義の流行とともに、19世紀にはいと、多くの作家や画家たちがこの地を訪れるようになり、19世紀末には、一躍選ばれた場所となる。ブルターニュの海は水浴客に汚された海ではなく、人間が無限の空間とじかに向き合える海である。パリの喧噪から離れ、文明に侵されていない原初の風景のなかに身を置こうとした作家たちは、シャトーブリアン (François René de

CHATEAUBRIAND, 1768-1848)、ノディエ (Charles NODIER, 1780-1844)、テロール (Isidore Justin Sévrin de TAYLOR, 1789-1879)、バルザック (Honoré de BALZAC, 1799-1850)、ユゴー (Victor HUGO, 1802-1885)、フロベール (Gustave FLAUBERT, 1821-1880)、ドーデー (Alphonse DAUDET, 1840-1897)、モーパッサン (Guy de MAUPASSANT, 1850-1893) など、枚挙にいとまがない¹⁾。

なかでも、ブルターニュ半島の付け根にあたる部分、大西洋南岸に面した小さな町ゲランドは、中世に築かれた城塞と、その南に広がる深い入り江を利用した塩田で有名だが、このゲランドにかぎってみても、たとえばバルザックは、1839年にいちやく小説『ベアトリクス』(Béatrix)²⁾のなかで、中世から時間が止まったような城塞都市の内側で暮らす名家を克明に描いてみせた。また、1847年にフロベールとともにブルターニュ地方を一周したマクシム・デュ・カン (Maxime DU CAMP, 1822-1894) も、この城塞都市やその外側に広がる塩田について、後に『野を越え、磯

* 立教大学観光学部教授

を越えて』(Par les champs et par les grèves, 1973) というタイトルで出版されることになる紀行文を残している。さらに、ドーデも1888年に刊行された『ある文学者の思い出』(Souvenirs d'un homme de lettres) のなかで、ゲランドの町と人々の様子を紹介している。以下、これらの小説や紀行文にゲランドとその周辺の土地がどのように描写されているか、当時の作家たちには、ブルターニュのこの大都市がどのように映っていたか、検討してみたい。

2. 城塞都市—静寂と不動の町

ゲランドの町は、14～15世紀に建設された城塞と堀に囲まれ、中世の趣を今に残す、半径わずか200メートルほどの瀟洒な城塞都市である。4つの門から内部にのびる道が交差するところにサン＝トバン教会があるが、バルザックの小説『ベアトリクス』の主人公である若い貴族カリスト・デュ・ゲニックの家は、この教会のそばに、あたかも町の象徴のように佇んでいる。彼は、カミーユ・モーパンというペンネームでパリで活躍する女流作家フェリシテ・デ・トゥーシユ(彼女もゲランドのそばに領地をもつ貴族の娘だったが、大革命のときに親兄弟を失い、大伯父に引き取られて育てられた)に夢中になっているが、ここで、フェリシテの活動の場であるパリとカリストが住むゲランドは、バルザックの多くの小説でそうであるように、対比的に描かれている。フェリシテが体現するパリが活力に溢れ、贅沢と気紛れに満ち、喧噪と混乱をも象徴する都市だとすれば、14世紀から続くゲランドの町は徹底して静寂と不動の場所として描かれる。この町は、パリとの連絡がほとんど皆無に等しいため、「新しい文明が亡霊かなにかのように通り過ぎる」のを眺めているだけの、「社会的運動から完全に切り離されたいくつかの町」³⁾のうちのひとつである。「1830年の七月革命のあとでさえ、ゲランドはまだ特殊な町で、とりわけブルターニュ的で、敬虔なカトリックの町、ひっそりとして、瞑想的な町、新しい思想はほとんど寄りつかない町だ⁴⁾」と言われている。家並みも、そのような町自体の不動性を象徴するかのよう、増築も改築もされず、最初の姿のまま、「道も400年前と変わらない⁵⁾」。

ここでは、あくまで小説の舞台としてのゲランドがどのように表象されているかが我々の関心事なので、カリストとフェリシテがこの後どうなるか、また、ベ

アトリクスがどんな女性なのかといった、やや複雑な物語の詳細に立ち入ることは省略して、次に、1847年、(したがって『ベアトリクス』を当然読んだであろう)マクシム・デュ・カンが、友人のプロペールとともにゲランドを訪れたときに見たものに注目してみたい。

3. 海岸と塩田の風景—1000年来の身振り

当時25歳だったプロペールは、父親とよき理解者だった妹を相次いで亡くし、無二の親友だったアルフレッド・ル・ポワットヴァンも結婚してしまったため、健康状態が悪化し、医者から気分転換のために旅を勧められていた。4ヶ月間にわたるブルターニュ大周遊はこうして実現するのだが、それに同行したのが親友のデュ・カンだった。旅の印象はふたりによって交替に書き留められ、後に『野を越え、磯を越えて』というタイトルで出版される。奇数章をプロペールが、偶数章をデュ・カンが担当していて、第4章のゲランドとその周辺の海岸地帯を担当したのはデュ・カンである。

デュ・カンは、城塞のなかにはいる前に、まず、周囲の風景に目を止める。春の日射しのもと、エニシダやサンザシの白や黄色の花が香りをまき散らし、小山では、羊たちが花の下に隠れたわずかな牧草を食んでいる。海は雲や岩と接するように輝き、女たちが岩の下にカニを探し、頭に載せたかごからは海藻がはみだしている。そして、彼女たちのあいだを、大きな黒い帽子をかぶり、白いゆったりとした上っ張りを着た塩田労働者(paludier)がやせ馬に塩の袋のをせて通り過ぎる……⁶⁾。デュ・カンはこうして、春の自然のすがすがしさを、そこに生活する人々の日常とともに、ビトレスクなタッチで描写する。

彼はプロペールとともに、ル・プーリガンからル・クロワジックにいたる湾を「海藻の類い希な香りを嗅ぎ、大洋の声だけに耳を傾けながら」足をぬらして歩いてみる。そして、沖のほうに目を向ければ、「海は穏やかで魅力的な様子をしていて、われわれの右のほうでは、速く、黄色い砂浜の上で白い波を立てており、一角では岩にぶつかって輝いていた。前方では、あまりにも遠くまでつづいているので水平線に隠れてしまっていた⁷⁾」。

『野を越え、磯を越えて』はまた、この湾の独特な風景をかたちづくっている塩田にも言及する。潮の満ち干が激しいこの地方には1800ヘクタールにおよぶ

塩田が広がり、現在なお、風と太陽の熱だけを利用した1000年来変わらぬ製法で上質の天然塩が生産され、年間1万トン以上が日本を含めた世界各国に輸出されている。満潮時に水路を通して塩田に引き込まれた海水は「海水槽 (vasière)」で不純物を沈澱させたあと、いくつかの池を歩いていくあいだに太陽熱と風の力で濃度を増し、最後に「結晶池 (œillet)」で塩の結晶になる。8000におよぶ碁盤目状の結晶池は上方から見るとさながらあぜ道に囲まれた田んぼのようで、この地方独特の風景を生み出している。

しかし、デュ・カンの印象は両義的である。彼は初め、畑も野原も塩田に変えられてしまったこの風景を無味乾燥で悲しい風景ととらえる。「毎朝清められ、草を取り除かれ、永遠に清潔であることを強いられたこれらのまがい物の沼ほど醜くて愚かなものは何もない。人間のつくりだすものはいつでも醜く、しばしばばかげている。それにたいして自然がつくりあげるものはいつでもすばらしい⁸⁾。」ここには、手つかずの自然を求めてわざわざブルターニュまでやってきた作家が、自然を統御してみごとにつくりあげた産業を目の当たりにして味わた複雑な思いがうかがえる。現代のわれわれから見れば、1000年来の製法を今に受け継ぎ、火も機械も使わずに風と太陽の光と人間の労働力だけで塩を生産する塩田労働者の身振りはエコロジーの原点、オーガニックそのものと見えるが、これほど見事に手を加えられた自然はデュ・カンたちにとってはもはや自然ではなく、人工以外の何ものでもなかったようだ。

しかし、最初の批評が辛口だったデュ・カンも、バツまで来てふたたび塩田風景に触れたときには少し意見を修正している。「近くから見ると、これらの塩田はぞっとするが、遠くから見れば美しく、全体的な調和のなかにうまくとけ込んでいる。ものごととはすべてそんなものではないだろうか?⁹⁾」

デュ・カンたちはこのあと、城塞の内部を訪れるが、そこではとくに教会建築の細部、なかでもスタンドグラスや、柱頭のモチーフや、建物の正面の部分などに注目する。しかし、自然対人工という図式において自然に加担するこの作家の矛盾は、人間の技術の粋を集めた教会建築の細部にこだわる態度にははしくもあらわれている。

4. ゲランドの人々の楽しみ

当初、出版を予定していたわけではないフロベールとデュ・カンの紀行文は、結果的に1885年、カンタン社版フロベール全集の『三つの物語』の付録としてフロベールのテキストだけが出版され、翌1886年にはシャルパンチエ社からも、『野を越え、磯を越えて、ブルターニュ紀行』というタイトルで出版される。それに影響されたかどうかは定かではないが、19世紀末になると、作家たちのあいだでブルターニュ地方は確実に特権的な場所となり、彼らはこぞって近代文明に侵されていないこの秘境に出かけようとする。アルフォンス・ドーデもそのひとりである。1888年に発表された『ある文学者の思い出』のなかの「ゲランドの競馬」にはゲランドの人々の服装から、音楽、踊り、余興にいたるまで、事細かに報告されている。

ゲランドの城塞の入口でまずドーデを引きつけたのは、圧倒的な数の花々である。「古い石のあいだから、野生のクワガタソウが大きな束になって咲き乱れ、キツタが這い、藤がうねうねと伸び、(……) 大量のバラとテッセンがぶらさがっている¹⁰⁾。」初夏の花々に出迎えられて城塞のなかにはいっていくと、そこはまるで、500年前にタイムスリップしたかのようだ。ひっそりとした小道には古い館が建ち並び、扉の隙間からはアジサイの茂みが見える。ドーデは「瀟洒の花が咲き乱れた廃墟¹¹⁾」こそ、ゲランドの特徴だという。500年前から時間が停止したようなこの町には、「夢見がちな静寂が住みつき¹²⁾」、14世紀に建てられた教会のまわりでは、果物売りの女たちが口もきかずに編み物をしている……。

ところが、静けさに満ちたこの町も一変してにぎやかな日がある。競馬が催される日曜日である。この日ばかりは、ル・クロワジックヤル・プーリガンなど近隣の町から「農民たちを乗せた荷馬車や、おとぎ話から出てきたような古風な四輪馬車や、かぶり物をつけた小間使いと木靴をはいた小姓のあいだに上流階級の老婦人が腰掛けた二輪馬車¹³⁾」が到着する。彼らが教会の歌ミサに出席しているあいだ、町からは人影がなくなるが、12時の鐘の音とともに教会から人々があふれ出てくる。連祷、使徒信教、主の祈りなどに混じって、教会の入口に陣取った物をいたちの朗唱が響き、それに、女たちがかぶっているこの地方独特の白いかぶり物や、丈の長い白い上っ張りに、これまた

白いゆったりしたズボンをはいた塩田労働者たちの服装などが手伝って、まるで中世に舞い戻ったかのような錯覚を起こさせる。これらの群衆は1時間後には、町から1キロ離れた競馬場に集合するのである。

海が見下ろせる競馬場の観覧席では、人々の態度も歌も「すべてが素朴で、原始的でほとんど野性的だ¹⁴⁾」。女たちにも少しも気取った様子がない。「そう、ここには見るために来たのであって、見せるために来たわけではないのだ¹⁵⁾。」仕事のときには無口な人たちも、今ばかりは屋台のリング酒やワッフルやソーセージで舌がほぐれているようだ。

パリの競馬をまねした障害物競走はドーデたちの興味をあまりそそらない。しかし、雄ラバやブルターニュ産の馬による町対抗の競馬は、頑固なラバたちを一列に並べるのに苦労したり、女たちまで立ち上がって夢中で自分の町の代表を応援する姿などが、ドーデをとて楽しませたようだ。

競馬が終わってグラントに戻った頃にはもう夕暮れだった。提灯が灯り、教会の前の広場では花火が、そしてバグパイブ奏者のためには演壇が準備される。折悪しく降り出した雨にもめげず、若者たちはブランルを踊り始め、そうしているうちに、馬車は1台また1台と城塞を去り、城塞の石を被っていた花々が暗闇のなかで、「まるで眠れる森の美女の城を取り巻く、魔法にかけられた藪のように¹⁶⁾」大きく広がっていくのだった。

5. おわりに

中世から伝わる城塞と塩田で知られるグラントの町を、バルザック、デュ・カン、ドーデの3人の作家の目で眺めてきた。バルザックは、とりわけ静寂と不動性が支配する城塞の内側の空間を強調するが、デュ・カンはむしろ城塞の外側に広がる海岸や塩田について多くを語っている。彼が目にするのは、春の日射しのもとで野原をおおう花々や、海岸で海藻やカニを集める女たち、塩を運ぶ塩田労働者などが織りなすピトレスクな光景である。そして、ドーデは、静まりかえった城塞の内部の「瀟洒で花が咲き乱れた廢墟」と、町の外の競馬場でのにぎやかさを対比的にとらえる。

3人3様の印象をとどめてはいるものの、そこに共通しているのは、城塞の内側の世界も、塩田で営まれる労働も、500年、1000年前から同じ身振りを繰り返しているという、時間の停止の印象であろう。19世

紀後半、パリの文明が届きにくいブルターニュは、独自の服装や信仰心、産業などを固持することによって、かえってパリの文人たちをひきつけたのである。それらは、咲き乱れる花々、女たちのかぶり物、塩田労働者の白い服、塩田などの視覚的要素としてとらえられることもあれば、教会の音楽やバグパイブの音色など、聴覚的なものとしてとらえられることもあった。それらが、フランス国内にいながらにして、首都では失われてしまった古き時代やある種の異国情緒を旅行者たちに感じさせ、ブルターニュの魅力になっていたと思われる。そして、21世紀の現在、一時は衰退したグラントの天然塩が世界中で再評価されるようになったのも、彼らの徹底した反近代的な身振りが現代の自然回帰の思想やエコロジー感覚に結びついたからではないだろうか。

注

- 1) Voir Paul RIDSKY, 《La Bretagne et les îles de l'ouest》, in Jean M. GOULEMOT et al. *Le Voyage en France, anthologie des voyageurs français et étrangers en France, aux XIX^e et XX^e siècles*, Robert Laffont, coll. 《Bouquins》, p.674-676.
- 2) 第2部は1845年刊。
- 3) Honoré de BALZAC, *La Comédie humaine*. t. II, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1976, p.637-638.
- 4) *Ibid.*, p.640.
- 5) *Ibid.*, p.639.
- 6) Gustave FLAUBERT et Maxime DU CAMP, *Par les champs et par les grèves*, éd. critique par Adrienne J. TOOKE, Droz, 《Textes littéraires français》, 1987, p.208.
- 7) *Ibid.*, p.215.
- 8) *Ibid.*, p.209.
- 9) *Ibid.*, p.217.
- 10), 11) Alphonse DAUDET, *Œuvres complètes illustrées, Trente ans de Paris, Souvenirs d'un homme de lettres*, éd. de la Librairie de France, 1930, p.57.
- 12), 13) *Ibid.*, p.58.
- 14), 15) *Ibid.*, p.59.
- 16) *Ibid.*, p. 61.

*この研究ノートは2003年度立教大学観光学部プロジェクト研究費による研究「フランス文学と風景」の一部である。